



認知症研修開催

厚生労働省の2013年度調査によると、認知症患者は全国推定462万人と発表されています。昨年の全国高齢者は3079万人



で、高齢者の15%が認知症患者となっています。特に、85歳以上となると40%以上の人認知症と診断されます。他の疾患に比べ異常なほどの数字となっています。このような中、滋賀県が主催する、認知症の方が安心して医療を受けられる体制作りのために、病院職員全体が認知症について理解を深め、認知症の方やご家族に対する対応について考えることを目的にした出前研修会が滋賀県看護協会により実施されています。当院もこの事業に参加し、大津赤十字病院の認知症認定看護師 中田貴子先生を講師に迎え認知症研修会を開催しました。

研修会では…

- 認知症とは
- 認知症の特徴
- 認知症をきたす病因
- 中核症状と行動・心理症状 (BPSD)
- 記憶障害
- 加齢と認知症の記憶障害の違い
- 見当識障害
- 実行機能障害
- BPSDの対応の原則
- 今から出来る非薬物療法

について理解を深めました。

認知機能の障害で必ず現れる症状（記憶障害<新しいことを思い出せない>、見当識障害<時間や場所がわからない>、失認<品物をみても何だかわからない>・失行<服の着方や道具の使い方がわからない>、実行機能障害<段取りができない>）を中核症状といい、これに心理・社会的、物理的、身体的要因が加わり、二次的に現れる行動障害や精神症状（物盗ら

れ妄想<財布や着物を盗まれたという>、夜間せん妄<夜中に急に騒ぎだしたりする>、不眠、異食<食べ物以外のものを口に入れる>、攻撃的言動<声を荒げたり、手を上げたりする>、抑うつ状態<活動の低下>、幻視・幻覚<実際にはないものが見える・聞こえるという>、徘徊<ウロウロする>）などをBPSDといいます。このような場合には、認知症患者の心の叫びであるとうけとめ、個々のBPSDの背景を明らかにすることが大事であることを再認識しました。また、今は、何月何日なのか、季節はいつかなど時間や今いる場所等が判らないなどの見当識を高めるリアリティーオリエンテーションの活用（「おはようございます。今何時ですよ」・ただ「ごはんですよ」ではなく「朝ごはんですよ」等の声掛け）についても学びました。

今回の研修で学んだ事を日々のケアに活かし、認知症高齢者の方がその人らしく心地よい療養生活を送っていただけるよう職員一同努めていきたいと思ひます。

看護部長 家城 美千代

第8回いきいき健康教室

去る10月29日(火)「第8回いきいき健康教室」を開催しました。あいにくの小雨模様の天気にもかかわらず47名の方にご参加いただきました。今回は「脳卒中について～予防と早期発見が大事～」と題して、脳神経リハビリテーション科の藤田晃司医師が講演させていただきました。最初から皆さん真剣な表情で聞き入っておられ、中でも生活習慣病が脳卒中の危険因子になるとの話がでると会場が一瞬ざわめく場面があり、脳卒中に対する関心の高さがうかがわれました。また、藤原管理栄養士より食事の適切な塩分量についてお話させていただき、実際に塩分量の違う味噌汁を試飲され味の違いを体験していただきました。約一時間半の短い時間ではありましたが、自身の健康を保っていただくための参考の一つになれば幸いです。ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました。

地域連携室 係長 秀熊有里